子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1996年3月1日発行　［隔月発行］

文化高知

'96年3月 NO.70

「ふたり」 坂田 和

(財) 高知市文化振興事業団

半築半漁家

上田堯世

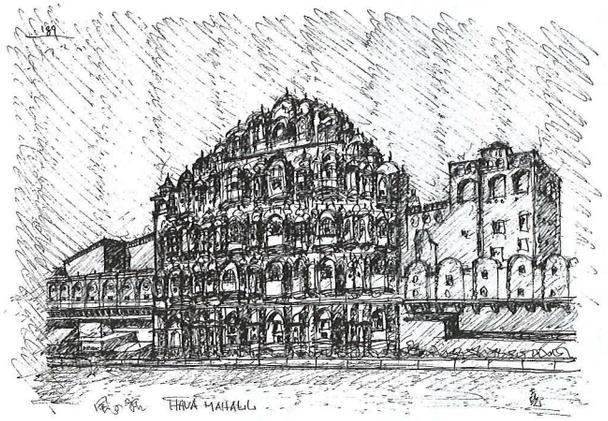
半築は僕の生業である建築家です。半漁は僕の精神の大半を占める漁師です。今頃自己紹介の時の職業を敢えて半築半漁家と答えています。しかし名刺には未だ刷り込むことができていません。建築に未だ確固たる自信を持てないからでしょう。近い日に大きな字で半築半漁家と刷り込める日を夢見ています。

僕にとって釣りと旅と建築が人生の全てと言っても過言でありません。この土佐は山国と言われますが一方で日本有数の長い変化に富む海岸線を持ちます。リアス式海岸である横浪半島・大堂海岸等の岩礁地、手結・甲殿・入野等の砂浜地、浦戸・宇佐・宿毛湾等の入江を持ち、種類・量とも豊富な磯魚が住みます。室戸・足摺では黒潮がぶつかり、土佐湾沖では黒潮が混ざり絶好の回遊魚の漁場でもあります。

僕自身の釣り歴もバラエティーに富みます。幼い頃の仁淀川での底瓶でのベニマスとりに始まり、鮎の毛鉤釣り、浦戸湾・宇佐湾でのニロギ・チヌ釣り、種崎・甲殿でのキスゴの投げ釣り、安芸・夜須・高知沖でのアジ・サバ・平目釣り、磯での石鯛・グレ・ヒラマサ釣り、宇佐沖での海老での鯛釣り、果ては土佐であき足らず八丈島へのヒラマサ釣り、男女群島へのグレ釣り、萩沖へのまぐろ釣り行等にも出かけています。

ここ二十年一番の御執心は宇佐湾での夏場のチヌ釣りです。夏場の大潮の満潮は夕方です。夏場は日が長く八時頃まで釣れます。三時頃現場に行くふうを装いながらアトリエをそそくさと抜け出します。もっとも最近ではスタッフ皆知って知らぬふりのようですが……。半時間強で宇佐です。行きつけのT貸舟店が舟と餌と釣れる場所・釣り方の情報を持って待ってくれています。釣り場へ直行。そこでは経済社会・情報社会の持つ競争心に溢れる顔と異なる自然を愛する柔和な良い顔の仲間が温かく迎えてくれます。二、三時間の釣りで夜の我家の食卓を賑わすに十分な釣果です。よい時は一・五kgを超すチヌを数枚ということもあります。

釣りは自然とのお付き合いです。ある時は拒絶します。ある時は優しく懐に迎えてくれます。



僕の建築はこの自然とのお付き合いそのものです。この自然が教えてくれるものがベースとなっています。優しい自然が教えてくれる風・光、厳しい自然が教えてくれる風・光、つまり、風・光はどちらの顔も持ちます。台風の恐しい風・夏の寝苦しい夜優しく頬をなでてくれる風。夏の強い日差し・冬のぽかぽか陽気の光。自然が人々に教えてくれる間取り・形・技を近代の科学崇拝で無視するなら必ずしっぺ返しに合います。

僕の建築はその自然のふところに飛び込み、自然が先人達に教えた技を持っての家造りです。つまり、土佐の恵みと先人に培われた技による家造りです。土佐の恵みは土佐漆喰・土佐和紙・土佐材（杉・檜）です。土佐の技の代表は古い民家の外壁が持つ水切瓦の手法です。これは土佐の「下から降る」と表現される豪雨より家を守るための蓄積された技です。土佐の恵みも技も長い時間が証明してくれたものです。自然と共生するためのものです。

僕の生業と遊びどちらも土佐の自然があってはじめて成り立ちます。土佐でこそ成り立ちます。この優雅な欲張った生き方・半築半漁家は職住接近都市ならぬ職遊接近都市でこそ成り立ちます。

地方の時代・高齢化社会のキーワードは職遊接近都市では？

（建築家）

相撲との出会い

山崎匡佑

大学二年で漫画界にデビューして早いものでもう二十数年がたつ、あっという間に来たような感じがする。たいしたヒット作も無いのに、幸運にも一度も仕事が途切れることなくやってこれたのは、自分の場合は面倒見のいい編集者に巡り合えたからだと思う。あともう一つは、デビュー以来一貫して相撲漫画にこだわったことである。

今でこそいろんなスポーツが漫画で取り上げられるが、当時は人気スポーツ漫画といえば何といっても野球であった。右の漫画を見ても左の漫画を見ても野球漫画が載っていない漫画本は無いのである。でも自分は野球にはいっさい興味を示さなかった。描いていくものはすべて相撲漫画ばかりである。当時の編集者には、「こんなマイナーなスポーツを取り上げたらダメだよ、野球を描け」と言われたものであった。でも自分はガンとして首をたてには振らなかった。若かったこともあったが、何より好きでもないジャンルを描けといわれることほど、漫画家に苦痛なことはない。よく編集者とケンカしたものである。

しかし、つくづく今となってはそうしなかった自分に感謝している。そうしなかったからこそ今があるからだ。当時、編集者に請われるままに野球漫画を描いた連中は、今はほとんど残っていない。

忘れもしない昭和四十年、大相撲一行が高知市に巡業に来た。たまたま自分達は一宮から高知市営球場とは目と鼻の先にある相撲場の近くに来ていた。張ってあるテントをヒョイとめくり中に入った。ドスンと何かにあたった。よろける自分を誰かがスッと担ぎあげてくれた。今まで、嗅いだことのない甘い匂いが鼻をツーンとくすぐる。いわゆる力士が髷につけるビンツケ油である。担ぎ上げてくれた男は自分をソッとおろし、頭をなでてくれた。その浅黒い肌とやさしく笑った笑顔からこぼれた白い歯は今も忘れられない。白い稽古廻しに浴衣を引っかけ、若い付き人にかしずかれて歩いていく後ろ姿は、今でも目をつぶれば昨日のように目に浮かぶのである。

自分を担ぎ上げてくれた力士は当時の大関北葉山である（現・枝川親方）。この、子供心に目の当たりにした北葉山の雄々しさは今だに忘れられない。わずか数秒ぐらいのこの北葉山との接触が無ければ、果たして自分は相撲がここまで好きになったかどうか疑問である。三十年近くたっても今だにこのことは鮮明に覚えている。

それから相撲がいっぺんに好きになった。寝ても醒めても相撲、相撲の少年になったのである。これが三十数年たった今でも続いているのだから自分でもたいしたものだと感心する。

自分は作品のアイデアに行き詰まったときによく、相撲部屋の朝稽古を見に行くことにしている。朝六時前には稽古場の上がり座敷に座り、序ノ口、序二段の力士達が稽古するところから見る。そして三段目、幕下、十両、幕内、大関、横綱と順に降りてきて稽古するのだが、稽古場には兄弟子も弟弟子も無いとはよくいったもので、ホントみんなドロドロになるまで稽古する。体力気力のギリギリの限界の所まで己を鍛えるのだ。これが雨の日も風の日も、本場所中だろうが毎日といっていいほど続けられる。一週間も通って見続けていると、つくづく自分の仕事なんてのは、この力士の稽古という仕事に比べれば、たいした仕事じゃないという風に見えてくる。今までアイデアで行き詰まっていた自分がバカらしく見えてくるのだ。正直いってこれで何度、イヤ何十回と助けてもらったか分からない。相撲部屋の朝稽古を見ることは、もう今の自分にとって生活の一部と化しているのだ。

何といっても自分が贔屓（ひいき）にしている力士が出世していく姿を見ていく楽しみである。

こんな相撲の虜にしてくれて、オマケに相撲漫画を描かせてくれて、そのおかげで生活ができている。あれもこれも、このきっかけをつくってくれた高知市営相撲場に感謝感謝である。

（漫画家）

パッチワーク・キルトに魅せられて

池　敬子

アメリカ開拓時代、貧しい生活の中、逞しい女性たちの手でたくさんのパッチワーク・キルトが作られました。大切にしてきた小さな布切れや、着られなくなった服等を解き、それらを気の遠くなるほど繋ぎ合わせ、暖を取るために綿を重ね、再び縫っていく。それは、アメリカ女性たちの歴史そのものだと思います。

特別な人や芸術家の作品ではなく、ごく普通の女性たちの手で作られた素晴らしい文化だと言えます。

古来、日本にも同じように、家族のために夜なべをし、母から娘に孫にと伝えられた夜具や着物、小さな針仕事等があります。国は違っても、一針一針に愛を込めた手作りの物には、温かみや優しさが感じられ、ふっと手で触れてみたくなります。

こうして何百年も伝えられた手仕事が、今、世界中の女性たちを魅了しています。物の豊かな時代に何故と思うことがありますが、それは誰もが、手作りの温もりや愛情を、自然に感じ取れるからだと思います。

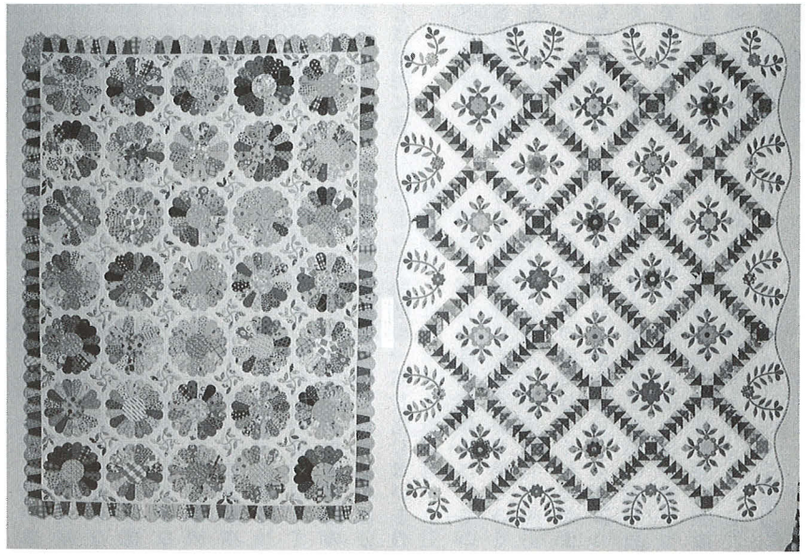
アメリカから世界中に広まったパッチワーク・キルトは、それぞれの国の生活様式に合わせ、個々の文化を持つようになりました。

日本においても、最初はアメリカの真似事であったキルトが、日本の良さを再発見するきっかけとなり、日本女性特有の器用さで、新しい日本のキルト文化が広まって来ています。

二十三年程前、洋裁をしていた私は、端切れとなった小布がどうしても捨てられず、三角形と四角形に切り揃え、繋ぎ合わせました。その頃、何かの本で、アメリカのアンティーク・キルトが紹介されているのを目にしました。

詳しい作り方の本もなく暗中模索の状態で、映画の一シーンに見たキルトのベットカバーや、雑誌の片隅の小さな写真に胸をドキドキさせたものです。その頃から針を持たぬ日はないくらい夢中で縫い続けました。それは、私たちの生活を、明るく豊かな気持ちにしてくれました。

そうして我が家で使うキルトが何枚か出来上がった時、私に、「布を生かす」ことには無限の可能性があるように思えて来て、沸き上る創作への気持ちが、胸を熱くさせるようになりました。

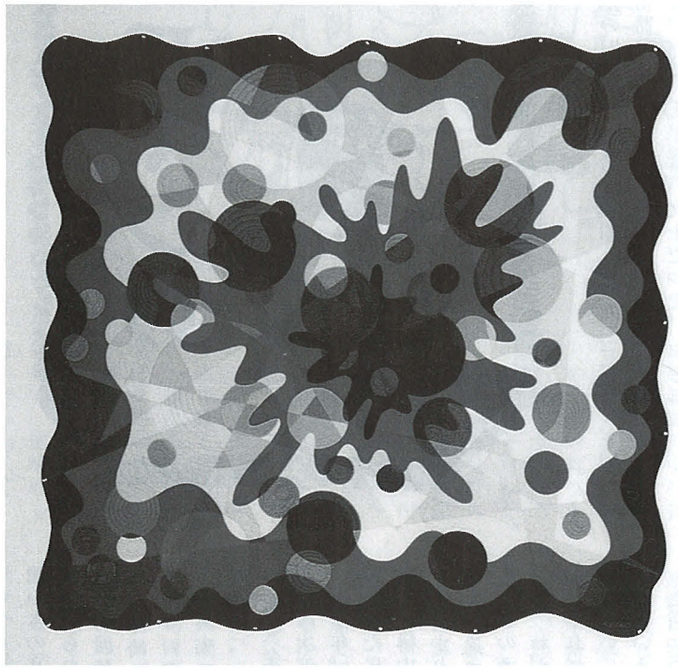


昭和五十五年全国創作壁掛けコンクール「黄金の針賞」の入選、続いて翌年、初めての個展を高知市で開催しました。その頃はまだパッチワーク・キルトを知らない人も多くて、

説明するのに大変だったことは、今でも我が家の笑い話となっています。こうして、素晴らしい幸運と家族の理解を得た私は、テーマに合わせて作品を考えるようになり、プレッシャーや苦しみも同時に楽しみながらの制作に入って行きました。何かに取り付かれたのではないかと思うくらい、ひたすらに縫いましたが、どうしても満足することが出来ず、次々に新しい作品に没頭して行きました。

今でも満足する作品には出合えませんが、近頃は〝それで良い、だから続けられるんだ〟と、やっと分かって来て気が楽になりました。

昨年秋、アメリカ・パシフィック・インターナショナル・キルト・フェスティバル・コンテスト創作部門で第一位の栄誉を頂きました。過去十五年間に「黄金の針賞」、キルトウィーク「優秀賞」、キルト日本展「金賞」等十五の賞を受賞し、地道に続けた私のキルトも、少しずつ認めて頂けるようになりました。



アメリカのコンテストで高い評価を得た作品を自分の目で確かめたかったこともあり、長年の憧れであったアメリカのキルトに逢いに行って来ました。何百年も前に作られたアンティーク・キルトに感激したり、現代芸術キルトのパワーに圧倒されそうになりましたが、未熟ながら、やっと自分のスタイルを確立しようとしている私のキルトを見つけた時、ブルーリボン賞に関係なく、嬉しくて思わず涙が溢れて来ました。

これほどまでに私を駆り立てたパッチワーク・キルトの力は増すばかりで、心良いプレッシャーを感じながら次回作への想いと共に伝統キルトの制作と指導に、新たなる挑戦を感じています。

最近では高知県のキルト愛好者も増え、約百五十名の会員で構成される、高知パッチワーク・キルターズ協会主催の〈パッチワーク・キルト展〉は毎年県立美術館で開催され、多くの入場者の絶賛を博しています。

「愛と友情」「助け合いと倹約の精神」は、パッチワーク・キルト愛好家の、昔から変らぬ信条であり、キルトの技術と共に受け継がれ、今後も、私たちが後世に伝えていかなければならない大切な物の一つだと思います。

パッチワーク・キルトの良さは、誰もが自由に個性を表現出来る簡単な方法にあると思います。肩ひじ張らずマイペースで、自分なりの作り方で、自分にとって何が必要かを知ることが、上手に縫うことより、より大切なことだと思います。それは生きていく上で、自然に感じる知恵のようなもので、自分の心に素直になれば、キルト作りは少しも難しいものではないと思います。

私は、大好きなキルトを楽しく作ろうと思います。ですから、無理はしません。今、自分に何が出来るか、何を作りたいのか良く考え、十分な下準備の後、一枚一枚を大切に、心を込めて縫い上げて行きます。次回作のために、現在手掛けている物をきちんと仕上げます。布と語り合いながら、黙々と縫う時、私はキルトを作るために生まれて来たのだと感じることがあります。

一枚のキルトが出来上った時の喜びは勿論ですが、賞を頂いた時や、個展の時等、家族や友人、知人達、またそれまで知らなかった人々までが一緒に喜んで下さる時、二十三年余りのキルト三昧の幸せを、改めて感じます。

パッチワーク・キルトを通して得た多くの友情が、私の人生の中で、一番の財産であり、今後の制作の励みとなることと思います。

（キルト作家）

昭和ロマンの残片

堀内　豊
（カットも筆者）

いまの東京都大田区馬込の旧名は荏原郡馬込村で、昭和の初期は新進作家がたむろしていたから、いつしか馬込文士村といわれるようになった。

その馬込村に近い南千束の洗足池のほとりに、玄関を入れて四間の数寄屋つくりの茅屋があった。住人は作家の田中貢太郎（高知市仁井田出身）である。その家を、小説家の尾崎士郎が、貢太郎の俳号をもじって「桃葉居」と名づけた。

さて、田中貢太郎を中心に随筆雑誌『博浪沙』が発刊されたのは、たしか昭和八（一九三三）年で、同人は主に馬込や萩窪、田端あたりにいる若い文士だった。

かれらは貢太郎の気風にひかれて、桃葉居参りをして、酔談三昧の憂さ晴らしをしたそうだ。

ところで桃葉居に、例年、歳末がくると酒の四斗樽が送られてくる。寄進者は銘酒「瀧嵐」の醸造主、伊野部恒吉（通町・現在の上町五丁目）である。すると、待ってましたとばかりに、桃葉居から緊急発信が、『博浪沙』同人の面々に放たれる。

「このたびわが土佐国より四斗樽到来せり。よって十二月×日×時に鏡ぬきの宴を張りたし。欣喜して馳せ参じられよ」

天狗回状の受取人は、尾崎士郎、その尾崎から〝桃葉翁の秘蔵の弟子〟といわれた井伏鱒二をはじめ、田岡典夫（高知市赤石町出身・直木賞作家）、富田常雄、榊山潤、大鹿卓（詩人金子光晴の弟）、添田知道、鈴木彦次郎、平野零児等々である。

ある年。鏡ぬきの宴が終わり、酔いしれた尾崎士郎、井伏鱒二、富田常雄、榊山潤は仲間とわかれて、二カ所ばかり飲み歩いた。

その途中、尾崎士郎が、「田中さんとこの酒はふしぎだぞ。あれで酔うと、わが家の方向がわからなくなる。それにつまらない女の顔がとてもきれいに見えるが、あれはいったい何という酒だ……」

と言った。すると井伏鱒二が、

「ウン、あれか。あれは狸正宗と言うんだ。わかったか。」と、ニヤリと笑って言い放った。

それでいつしか「瀧嵐」は「狸正宗」にバケてしまった。そんなことで、ひまをもてあますと尾崎士郎は、桃葉居に奇襲をかけて、「世に容れられぬ嘆きを吹きとばすことなぞは、狸正宗二合をもって足る」と、ほざく始末だった。

さて、これから話は変わる。

昭和十（一九三五）年五月。高知新聞社の企画で『博浪沙』の一党が高知へ招かれた。

先発隊の田中貢太郎、井伏鱒二、平野零児、清水泉（田中貢太郎の娘婿）を、潮江の桟橋で出迎えたのは、土佐商船の小林民吉社長、土佐電気社長の宇田耕一、野村自動車（現在の県交通）社長野村好之、高知新聞社の野中楠吉社長、瀧嵐の伊野部恒吉等々であった。

それより三日遅れて、尾崎士郎、鈴木彦次郎、寺田瑛が颯爽と到来した。

『博浪沙』一党の、高知滞在のあいだの行状を、土佐日曜タイムスというヨタ新聞が、こんな記事を出している。

「彼等は五月六日、高知に到着するや直ちに旅館延命亭において一斗六升の酒を飲み、その翌日は寒梅軒において一斗二升、更に五月八日にいたるや、後続の同人を迎え、得月楼において二斗一升、その夜は狂踏乱舞のかぎりをつくし、余勢を駆って市外の遊廓に転遊し、扇亭にのぼるや云々……」そして最後は、「くたくたのふやふやとなり、腑抜けの呆助となって東京へ帰った」と結んでいる。

これを回し読みした一同は、ただ

一九九六・一

唖然としてゲタゲタ笑うよりほかにすべがなかったという。

さて、彼等は五月九日に帰京することとなり、朝十時に出航する神戸行の汽船に乗るまでのあいだ、歓送の宴にのぞんだ。高知新聞野中社長や高知の名士。連日連夜、饗応につとめた伊野部恒吉たちが、朝っぱらから献酬を重ねた。

頃合いを見計らって、高知新聞記者の青山茂が、田中貢太郎のところへいって、「先生、記念にひとつ…」と色紙を差し出した。貢太郎はすらすら染筆した。

磯山の若葉に聞けり蟬の声

貢太郎は尾崎士郎にむかって「どうじゃ、尾崎君も書いてやったら」と言うと、尾崎は酔眼朦朧として書いた。

黒潮にわが朝マラを洗いけり

色紙を手にとって貢太郎は、「ううん」と唸って絶句したそうだ。

時は流れた。日中戦争。太平洋戦争の暗黒の時代に、変転をかさねた『博浪沙』の同人も、生き残ったものは数名をかぞえるのみとなった。

昭和二十八（一九五三）年某月某日。現在、高知新聞夕刊に『鎌倉通信』を連載している横山隆一氏と、尾崎士郎が奇遇した。そのとき尾崎は、十八年前に土佐で豪遊した思い出を語り、談たまたま自作の即興句「黒潮や…」を披露すると、横山氏は好奇心にかられて、「これから土佐の有志に謀って、室戸岬にその句碑を建てるようにするが、除幕式の折は尾崎君、かならず来てもらいたい」と真顔で言ったそうだが、悲願は果たせなかった。――尾崎士郎は昭和三十九（一九六四）年、六十六歳で死没した。もしも横山隆一氏の尽力で、

黒潮にわが朝マラを洗いけり

の句碑が、室戸岬の巌頭に建ったとしたら、桂浜の坂本龍馬像も、その近くの桃葉先生碑の田中貢太郎も、わが意を得たりとばかりに、破顔一笑するだろう。

（一九九六・一・改作　雑文家）

賛助会員募集中!!

会　　費　年額　2,000円
特　　典
①　機関紙「文化高知」を年６回お手元にお届けします。
②　事業団発行の出版物の10%割引（一部例外あり）
③　主催事業や刊行物の案内（マスコミ利用の場合あり）
〔※上記特典は申し込みいただいた日から１カ年有効〕
※お申し込み　①郵便振替　②現金書留　③直接事業団へ…
いずれの方法でもけっこうです。

「モッタイナガリ屋」古本屋の心と見つけたり

片岡千歳

1 知事公舎の松

毎朝店に通う道に、知事公舎の南側の道を通る。信号のない道を選んでいるうちに、そこを通るようになって何年にもなる。

帰りは夜なので、明るい電車道に沿って帰る。

十二月中頃に、公舎の庭に庭師が入って手入れをしている。公舎の松は巨木で道の上に南枝向日よろしく伸びている。庭師さんはたいてい二人いて手際よく剪定していく。切り落とされた松の枝葉は道に散乱している。私はその下を通るとき「松の枝を頂いてよろしいですか」と大きな声でことわっておいて、自転車から下りて二本ぐらい松の枝を頂いて帰る。

剪定の作業中に出合わなかった年もあるけれど、もう何年もこうして松の枝を頂いて、足軽が殿様に正月の松を拝領する気分を味わっている。

持ちかえった拝領の松は、庭の隅に水を張ったバケツの中で正月まで待機してもらう。松は一枝添えただけで菜の花も水仙も正月の雰囲気を盛り上げてくれる。

門松は印刷の松におまかせしても、正月は松の出番は多く、中でも欠かせないのが、下手な料理を引き立ててくれる皿鉢の飾りの松。

大根のしっぽを切って松の小枝を刺し、羊羹の皿鉢に添える。皿鉢の料理はなんでもいい、松の小枝一つが正月にしてくれる。

☆

お金を包む袋に「寸志」などと書く、ほとんど同じような意味で「松の葉」と書くこともあるらしい。「寸志」よりはるかにふくらみのある言葉ではないか。

私はにぎり寿司の皿鉢にも松を添えているのを見て、あっ！そうか、これが「松の葉」かと思ったことだった。

松はただゴミにするにはモッタイナイ。

2 紙は神様

近年の出版物の量の多さに困惑している。古本屋を生業としている立場として、紙の原料のパルプの枯渇を心配する。枯渇せぬとしても、ほとんど輸入にたよっているとされていることに、取り返しのつかぬ自然破壊を、地球上のあちこちに引き起こしているのではないかと、素朴に心配する。

小さなことでも自分に出来ることをと思い、リサイクルには心して協力している。新聞紙はむろん牛乳パックをはじめ、頂き物の入っていた箱も畳んで束ね、汚れてさえいなければ紙切れも、紙袋に集めておいて回収してもらう。回収屋のおじさんがそれを見て言う。

「おばさんもショウこまかいのう」。

「紙は神様やからね」と私。

「まことやね」と言って彼も笑った。回収屋の彼にしても古本屋の私にしても、紙あっての商売である。

☆

古本屋に集まってくる本は、一応役目の終えた本である。つまり誰かに一度は読まれた本もしくは雑誌である。

それにしても大げさな表現をすれば、地球環境を破壊してまで作るに値する出版物か、と思われる物がいかにも多いと思う。

たとえば小説の場合、ある作品を雑誌に載せて、ハードカバーの単行本にして、廉価本の新書版にし、さらに文庫本にする。作品によっては、全集物やアンソロジーとして登場することもある。全集物やアンソロジーになるものは、作品の命のながいものが多いから良しとしても、大きな無駄遣いに等しいこの方式を、どこかで規制できないものだろうか。

またA4版とかA5版の絵本や写真集を作っておいて、さらに迫力も作品の良さも損なわれる、ミニサイズにしてまで刊す必要があるだろうか。

資源の無駄遣いとか自然破壊以前に、本を作る側の良識が問われる。

3 活字は尊い

活字は尊いものだった。子供のころ新聞を跨いで叱られた。教室でなくても、教科書を開く時はおし頂いてから開いた。

そう言えばおし頂く所作も、私の生活からほとんど消えかけている。

尊いものが無くなったわけではない。尊いと思う心が失われていると自戒している。

あまりに物が氾濫し過ぎている。本の世界も例外でなく、愛書家や本の探究者は喜んでばかりいられない状況にある。業者も同様。

古本屋は大きく言えば、文化遺産としてのこす本と、それに値せぬものをフルイに掛けるような役目をしていると思う。古本屋が意識する、せぬにかかわらず、読者の選択がそうさせる。器用にフルイに掛ける作業ができない者は、古本屋として生きにくい。

私自身いま生きにくいそこにいる。

「手間暇かけて資源を無駄遣いして」などとボヤキながらも、活字の印刷されているものを無下に捨てることができない。捨てるには私なりの覚悟がいる。

いよいよこれはツブスぞと覚悟して、ひらひらとページをくる。

——水無川は「みなのがわ」と読む——又——身を巨いなるものにして、天地山川を見んとする心——こんな文字が目に飛び込んでくる。

子供がこぼしたご飯つぶを拾うように、声を出して拾い読みする。モッタイナイ。

ツブシは、一時お預けとなる。

そんな訳で古本としての商品価値とはかかわりなく、たちまち在庫の山となる。

内容は無論、本の造りといい装丁といい、よれよれのボロ本でも、こちらに語りかけてくる本がある。ダスキンを掛けウェットティッシュで拭き、汚れが落ちない本にはパラピン紙のカバーを掛ける。糊の落ちた背にボンドをつける。

本と私のたのしい対話のときでもある。

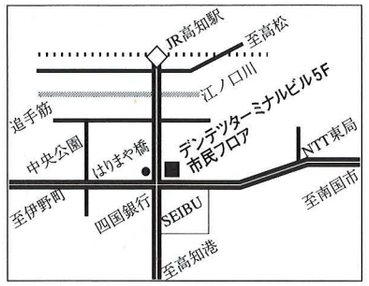
（古書店経営）

市民フロアのご利用を

展示や会議に最適！

広さ・内装　96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備

所在地　高知市はりまや町一—五—一・デンテツターミナルビル5階



申し込み　(財)高知市文化振興事業団
☎73—4365

ヒラメちゃんの木

畠中雄平

窪川町の松葉川温泉に行く途中、もうすぐ着くというところに一本の木があります。道端の作業小屋かなにかの横にすっと一本立っており、太い幹から放射状に出た枝振りは思わず車を止めて見とれてしまいたくなるほどです。今の季節の葉を落とした姿にかえって風情を感じますが、ある時それを眺めているうちにふと思いついたことがありました。

「ああ、これはヒラメちゃんの描いた木にそっくりだ」

大阪の下町、南海電車沿線と思われる界隈を舞台にした、はるき悦巳作のマンガ『じゃりんこチエ』に主人公のチエちゃんの親友として登場しているのがヒラメちゃんこと平田ヒラメです。生真面目で要領の悪い彼女は〈どんくさい〉とクラス委員のマサルたちに馬鹿にされたりするのですが、地区の相撲大会では必殺のやぐら投げで大活躍をし、絵画コンクールでは金賞を取るなど徐々にその隠れた才能を発揮するようになっていきます。学校の図画の授業ではあまり丁寧に描くためにいつも途中で時間切れになってしまう彼女が、こころゆくまで集中し時間をかけて仕上げ、絵画コンクールで金賞を受賞した絵に描かれていたのは近所のひょうたん池の端の木でした。それがくだんの木にそっくりなのです。

その木をながめながらぼくはヒラメちゃんのことを少し考えました。

繊細で傷つきやすい心の持ち主の彼女は、〈どんくさい〉外見や行動を日々悩んでいるのですが、チエちゃんたち周囲の人達との関係が深まる中で少しずつありのままの自分を許せるようになり、自分を表現することに積極的になっていきます。そして、彼女は話がすすむにつれて確実にそのファンを獲得していきます。彼女の前に行くと、バクチとヤクザをドツくことだけのために生きているチエちゃんの親父のテツのひねくれ根性もなぜか素直になってしまいます。四十前後とおぼしき彼が「わし……お前の前やと素直になれるんや」と柄にもなく真面目な顔で小学五年の彼女に相談を持ちかけてきても、彼女は一生懸命に相手のことを考えて話にのろうとするのです。

彼女は他人を傷つけはしないかといつも気をまわし、自分自身もほんの少しのことで傷ついてしまいます。そんな彼女に似た子どもたちをぼくは何人か知っています。

不登校になっている子どもたちにはいろいろなタイプがいるのですが、そのなかに何人かの〈ヒラメちゃん〉をみることがあります。他の子がいじめられているのをみて、悲しくて、それから学校に行こうとすると頭がひどく痛くなる女の子。先生の暴力に腹を立て、それに抗議できない自分に腹を立て登校できなくなった男の子。彼や彼女たちは学校に行かなくなった時、その理由を何も話しません。そして家の中に閉じこもります。親たちはそんな彼らの様子に狼狽し、何とか早く学校に戻って欲しいと焦るのですが、その様子が余計に彼らを自己嫌悪におちいらせていきます。「今のままのあなたでいい」というメッセージを伝えて欲しい、ぼくはそのことをこういう場合の親たちに話します。

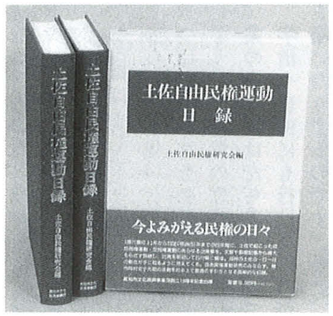
今の子どもたちは時計の針に追い立てられるような生活を送っていて、そこからいったん外れてしまうと「自分はだめな人間なんだ」と思い込み、閉じこもったりヤケになったりしてしまいがちです。親たちもまた「どうしてうちの子だけが普通にやれないのか」と思い、子どもを責め自分を責めます。でも、本当は、人間は何かをなすために生きているのではなく、生きているそのことが人間の意味なんじゃないだろうか、今の世の中のリズムに乗れなくたってそれはそれでいいじゃないか、一人ひとりのいのちのリズムを大事にしてそれをしっかり自分で抱きしめ肯定することが流れに乗れなくなってつまづいたように思えたときに大切なことなんだ、とぼくは彼らに伝えたいのです。世の中と折り合いをつけていくのはその後でもいいのではないでしょうか。子どもたちが自分の力で動き出すときには、ぼくたちが思うより力強くスクッと立ち上がるものです（もちろんそれが単純に学校へ戻ることを意味しているわけではありません）。それを心から信じて待つことができる周囲の姿勢が、子どもたちの成長のためにとても大事なことなのではないかと思うのです。

松葉川温泉近くの「ヒラメちゃんの木」

ヒラメちゃんは、決して彼女の才能ゆえにまわりから認められ愛されるようになったわけではありません。〈どんくさい〉自分を嫌悪せず、傷つき揺れながらそれでも私は私であってここから始めるしかないと思い定め、自分なりのやり方でいろいろなことに取り組むなかで彼女の才能が開花して行ったのでした。チエちゃんと一緒にひょうたん池に写生に行ったヒラメちゃんは、彼女の〈どんくさ〉さをこころゆくまで発揮し、〈ヒラメちゃんの木〉を描きあげます。夕日を背に一本だけ立っている冬枯れの木、太い幹としっかり張った枝、ぼくにはそれが彼女の自画像のように思えることがあります。

ぼくの前に現れる子どもたちがいつの日か〈ヒラメちゃんの木〉を描ける日が来るのを信じて、待つことをぼくの大事な仕事のひとつと思い続けていきたいのです。

（精神科医）



高知市文化振興事業団創立10周年記念出版

土佐自由民権運動
日　録

土佐自由民権研究会編
B5判・上製本・函入り　496頁
定価10,000円（税込）

紫式部の造った男たち［Ⅵ］

宇治の男君 ―匂宮―

藤田　加代

源氏物語第三部の始発である「匂宮」巻には、思春期を迎えた二人の男君が登場します。一人は十五歳の匂宮。当帝の三宮で明石中宮腹の皇子でした。今一人は十四歳の薫。源氏が晩年に得た子息で、女三宮腹の若君でした。この二人は、美しい姫を持つ名門貴顕にとって、理想の婿君候補だったのです。

◇

世人は彼らを「匂兵部卿宮、薫中将」と併称し、その美しさを称えました。あだ名の故は、彼らの「芳香」に関わることで、人物造型に芳香を絡ませた新しい試みが見られます。薫はかぐわしい体香の持ち主でしたが、それは天性のものでした。あたかもそれは、罪の十字架を背負って物語に登場した、仏の申し子のような薫を特徴づける、この上ない属性のように思われました。しかるに、この薫の薫香が、匂宮にとっては羨望の的でした。彼は花の香に執し、薫への嫉妬と羨望の揺めく競争心から、人工の薫物（たきもの）をひたすらたきしめたのです。それは、「なよび、やはらぎて、好いたる方にひかれ」る、偏執的なまでに昂ぶってゆく匂宮の性向を象徴的に示す行動だったと言えましょう。

◇

幼時から父帝母后に重んじられ、紫上の鍾愛を一身に受けてわがままいっぱいに育った匂宮には、天真爛漫に我を通して、兄宮にも譲ろうとしない気性がありました。長じてその気質は、「わが心より起こらざらむことなどは、すさまじく思しぬべき御気色」を見せ、敷かれた規範のレールに乗った女性関係を厭うようになってきます。時の権力者である夕霧右大臣の婿になることにも気が進まず、彼の女人への好尚は、片親の宮の御方（故螢宮の姫・母は真木柱）に向かい、やがて零落の八宮の姫たちに向かうのです。

「時」に寄り従う世俗に反乱し、わが好みに執する匂宮には、「あだあだし」く「いと好きたまへる宮」という風評がつきまといます。けれども彼の本質は、単純な好き者というよりは、「深くしみたまふ」性向であり、「やう変はりしみたまへる」ものでありました。言い換えますと、己（おのれ）の嗜好や好尚において、偏執的なまでに先鋭化してゆく情熱がその本質で、それこそが、光源氏の正当な色好みの後継者でありながら、匂宮を源氏と分かつ決定的な分岐点でありました。また、「挑ましく」「負けじの心添ひ」て、嫉妬や競争心が匂宮を異常に動機づける点も、宇治の物語の確かな指標になるのです。

◇

匂宮の心を宇治に向け、彼の情熱に火をつけたのは、奇妙なことに薫でした。有明けの月光の下で垣間見し、宇治の姫たちに魅せられた薫は、「聞こえはげまして、御心騒がしたてまつらむ」と思い、匂宮を訪れてたきつけます。宮を刺激し羨ましがらせようとする薫の思惑は隠微ですが、案の定、宮はたちまち乗ってきて、宇治へ自由にも行けないわが身分を嘆いたりするのです。また、八宮の死後、匂宮を宇治へ伴うことによって、宮と中君を結びつける役割をも薫は果たしました。身分・出生・女性関係、いずれをとっても匂宮に遠く及ばない薫の、たった一つ優位に立てる宇治の情報は、宮の好奇心と嫉妬と羨望をかき立て、それを軸にして、橋姫物語から浮舟物語へと、宇治の作品世界はゆるやかに回転するのです。

◇

匂宮が主人公としてクローズアップされるのは「浮舟」巻です。大君の没後、薫の見果てぬ思慕を妹の中君に転じた時、大君の形代（かたしろ）として登場することになる女人が浮舟です。浮舟は八宮の認知しなかった娘で、宇治の姫たちの異腹の妹という設定でした。薫は曲折を経て浮舟を引き取り、思い人として宇治に隠し据えますが、この薫の思い人を匂宮が盗み取ることで、浮舟物語は一挙にクライマックスを迎えるのです。それにしても、浮舟への匂宮の情熱には、薫と中君との仲を疑い、邪推した彼の嫉妬と、それが反転した競争意識が隠されていたように思えてなりません。浮舟に惑溺した宮が、二月宇治に行き、彼女を抱いて小舟に乗る「橘の小島」の段は、官能と耽美の極まる有名な場面です。

浮舟は実父に認知されず、養父にも遇されず、帰属する場所のない娘でした。その生い立ちから、満たされぬ心の空洞があり、愛を渇望する女でもありました。しかるに薫は、彼女を「山里の慰め」以上には遇さず、大君の代償に過ぎない浮舟だったのです。

穏やかな保護者としての薫の愛が分からない浮舟ではありませんでした。しかし、匂宮の反規範的で破滅的なまでに激しい情熱が向けられた時、彼女はそこに、熱い真実の「愛」を見てしまったのです。もとよりそれは単なる錯誤ではなかったでしょうが、「生」を賭ける愛でないことは確かでした。「やう変はりしみたまへる」刹那的・偏執的情熱であり、純粋ではあっても先の見えない、暗く熱した愛でもありました。

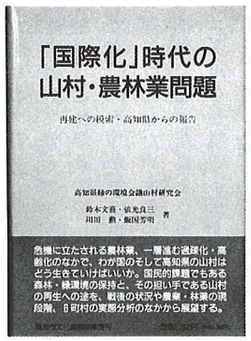
薫と匂宮とのはざまで進退極まり、入水しようとした浮舟は、救われて小野の里に入りました。しかし「手習」巻以後、仏道に入って勤行に励む浮舟と、匂宮はもう関わりのない人でした。入水の報を聞いた時の嘆きは深く、病床に呻吟するほどの宮だったのですが、薫とは別の意味で、宮もまた、浮舟の悩みとは何の接点も持っていなかったのでしょうか。薫・匂宮・浮舟の関係を通して、作者が語ろうとした男女の愛のありようを、深く考えさせられます。

◇

匂宮は薫とともに、宇治の物語が舞台に呼びあげた新しい型の人物でした。光源氏・柏木・匂宮と続く「色好み」の系譜にありながら、他の誰とも異なる恋愛主体だったように思われます。それは際立った個性の創造であると同時に、爛熟期を過ぎて頽廃期に入った平安朝の、時代の子というような若者像の一つだろうか、と思ったりします。

（完）

（高知女子大学保育短期大学部教授）



「国際化」時代の
山村・農林業問題

再建への模索・
高知県からの報告

高知県緑の環境会議山村研究会
鈴木文熹・依光良三・川田勲・飯国芳明 著

A５判・上製本・288頁
定価2,000円（本体1,942円）

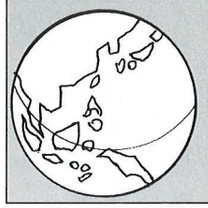
ズームアップ

東南アジア

（3）

アジアごみ事情

小林英治



住んでいる大学宿舎の当番で、資源ごみを出す日に立ち会った。色別に選別されたビン、空き缶、布類、新聞紙、木製品、電池類など、ごみの山が築かれていく。どうしてこんなに多く出るのだろうか。ひとつにはわが国における過剰包装が原因であるが、使い捨てを美徳とする風潮が広がってしまった結果でもある。

東南アジアで暮らして帰国し、まず気のついたことは日本人による資源のむだ使いであった。資源に乏しいわが国は石油その他を輸入に頼らねばならないのに、人々はあまり頓着しないようだ。

昔の人たちがよく使った「もったいない」「無駄にすると罰が当たる」ということばには資源に対する一種の敬愛の念が込められていたと思うが、時代は変わってしまった。

フィリピン滞在中私は高級住宅地として知られるマカティ地区に住んでいたが、毎朝まだ暗いうちに大型トラックがごみを集めにやって来る。各家庭でごみを外のドラム缶に出しておくと、これをあさりにやってくる者がいて、空き缶やビン、金属類など使える物はすぐになくなる。さらにごみが運び込まれる市の処理場にも一般に「スカベンジャー」といわれる人たちがいて、ごみの中から廃品を探し出して生活を立てている。

マニラの処理場のひとつに「スモーキー・マウンテン」（煙る山）がある。スラム街トンドの先にあるこの地には市内から集められたごみが山をなし、それがくすぶって燃えていることからこの名がつけられた。この山に掘っ立て小屋を建てて人が住み着き、空き缶や板切れはもとより、ビニールの袋や段ボールなどを集めて、生計を立てている。

ごみを集める少年（マニラ）

スモーキー・マウンテンはマスコミなどで取り上げられ悪名を馳せたこともあり、フィリピンの恥だとして政府がやっと解消に乗り出した。しかし収入の道を失った山の人たちの行方が気にかかる。

順調な経済成長とともに、東南アジアでは急速に都市化が進んでいる。それに伴って大都市から出るごみや環境の汚染が問題となっている。資源の再利用に長けているアジアの人々のよい伝統が失われる日が近いかも知れない。

ある時ジャカルタ近郊の海岸へ民間の団体とともにマングローブを植えに行ったことがあるが、海岸が流れ着くビニールやミネラル水のペットボトルで埋まっているのに驚いた。私たちはまず苦労してこれらのごみを取り除いてからマングローブを植えたが、これでは活着した苗が果たして育つだろうか気になった。環境問題に敏感なため大量の在庫を抱える結果になったヨーロッパの業者が、ビニールを安値でインドネシアに持ち込むと聞いた。

先進国への道を歩むアセアンの一角シンガポールは歩道沿いに花が咲き乱れる美しい国として知られる。この国では街の美観を守るため、道にごみを捨てたものは捕らえられ、道路清掃の強制労働につかせられる。その模様をテレビで放映するというので、清掃作業をさせられる人たちは、顔が分からないように皆頬かむりをしていた。それでもごみの投げ捨てが絶えず、ゴー・チョクトン首相は「国民の行動はまだ石器時代のままだ」と嘆いていた。

私は日本がごみの三Rすなわちリデュース（減量）、リユース（再利用）、リサイクルを積極的に進め、アジアの国の模範となるべきだと考える。ごみを厄介物としてとらえるのではなく、貴重な資源としてその活用を考える必要がある。自治体のなかでまだ一部に止まっているごみ発電も真剣に考えられてよい。

（高知大学人文学部教授）

第11回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

県道 御畳瀬～種崎フェリー　磯久 一翁

私語族

風俗歳時記

県立美術館を訪れると私語になやまされることが多い。

展示室の内部に備えてあるベンチで声高におしゃべりをする。なぜか女性に多いようで、展示作品とは無縁の世間話に余念がない。一心に鑑賞している人々の迷惑などお構いなしである。

＊

むかし、＜ひそひそ話＞、＜ないしょ話＞は「ささめごと」といい、特に男女間の恋の語らいをいった。この語は＜ささめく＞、＜ささやく＞からきたのだが、＜ささめく＞は、やがて＜さざめく＞、＜さんざめく＞、＜ざわめく＞となり、本来の意味とは逆に「にぎやかに騒ぐ」の意となった。

＊

このような＜ざわめき型＞私語族が我が物顔にのさばり始めたのはいったいいつ頃からであろうか。

記憶をたどると、初当選直後の橋本知事が成人式の会場で新成人どもを一喝した事件があった。その後、野球評論家の江本孟紀氏が、いわき市主催の「就職者の集い」で、「この田舎者！」と大喝してわずか十分そこそこで降壇した。仏文学者・昆虫学者の奥本大三郎氏が横浜国大を辞めたのも学生たちの傍若無人の私語が一因であったと聞く。

＊

そこで大学関係者に訊ねてみると、ここ十数年来、講義中の私語は全国的に猖獗（しょうけつ）をきわめているという。

「私語研究序説―現代教育への警鐘」（新堀通也著）という＜私語＞と真っ向から取り組んだ研究書まで出ていると知って驚いた。

著者は、私語の横行は戦後の教育と時代思潮のもたらした「公私のけじめ」の崩壊に起因すると説き、そこに至る過程の背景を、多くの「現場報告」を踏まえて詳論している。

＊

場所柄も弁（わきま）えず諸所に出没する群雀（ぴらすずめ）は、学窓を巣立ったのちも、踊りを忘れるどころか、益々腕に磨きのかかった芸達者揃いとお見受けした。（朴）

「遊釉会」

釉薬に遊ばれる会？

西森芙美子

昨年、美術館主催の陶芸教室で同じ班になった者同士が、講座終了後「このまま続けていきたいネ」という話になり、筆山文化会館をお借りして、昨年四月に、美術館で一緒だった人達、またその友達たちが集まって「遊釉会」というグループを作りました。

毎週木曜日の午後制作、二カ月に一回ぐらいの割合で窯入れをしています。基礎も何もできていない素人ばかりの集まりですが、道具や粘土、釉薬等を自分達で調達して、手探りながら頑張っています。

今までに四回ほど焼きましたが、満足のいく作品はあまり多くなく、「遊釉会」という名称ながら、まだまだ釉薬に振りまわされ、窯出しした作品を見ては、思った色が出ていないと反省することの方が多いようです。

今、陶芸の先生がボランティアで教えに来て下さり勉強させて頂いています。

「秦泉寺吹奏楽団」

団員募集中です

須内　友里

二年前「既成の吹奏楽団にはない、何か新しいものを自分たちの手で創り上げよう」との、現団長、隅田義明の提案に集まったメンバーは八名足らず…。当時はこのまま解散してしまうのではないかと心配しておりましたが、口こみ等で、メンバーも少しずつ増え、現在では四十一名になりました。十九歳から二十二歳までが主で、三十歳が年長組というところです。

今年二月二十四日には、初めてのコンサートを開催することになりました（この原稿を書いている現在、二月初旬なので、コンサートの模様をお伝えできないのが大変残念です）。

職業も色々で全員集まることがむずかしいのですが、コンサートを目前にして集まりもよく、熱い思いで練習に励んでいます。

よく、団名の由来を質問されます。それは、団長が秦泉寺に住んでいるのでこの名前、秦泉寺吹奏楽団になりました。

毎週、金曜日は筆山で、日曜日は高専の体育館で練習しています。

興味のある方は、是非一度見学に来て下さい。

団員募集中です（特に木管楽器）。

連絡先　高知市朝倉二二五－二

電　話　〇八八八－四〇－五三一五

陶芸倶楽部「草庵窯」

陶芸を生涯学習に!!

生田　竜山

陶芸倶楽部「草庵窯」は、公務員、看護婦、商店主、運転士、医師等色々な分野の会員が週一回定期的に陶芸（焼きもの）の創作を行っています。

ひとにぎりの土が、花びんになり徳利やぐいのみになる。すこしゆがんでいても、つぶれていても、それはシロウトの特権。――これこそ世界にたった一つしかないわたしの作品――と胸をはります。まず創る楽しみを味わいます。

創作活動と同時に老人保健施設、知的障害者更生施設等、身体の不自由な人やおとしより、こどもの皆さんに陶芸の楽しみを広めています。こうした活動の集大成として、一年に一回、目の不自由な人達に陶芸の「表情」を知ってもらうため「触れる陶芸展」を開催しています。

第三回「触れる陶芸展」を見ていただいた女性が高新「読者の広場」に感想を投稿下さいました。『一つひとつの作品には作者のいちずな思いが、土に焼きつけられているように、どの作品にも明るく優しく、たくましいものを感じました。このような作品展がますます発展することを、私は願います』

身体の不自由な人やお年寄りは内にひきこもりがちです。みんなと一緒に笑い合える環境づくりも「草庵窯」の活動の一つです。

陶芸を一緒に楽しみましょう!!

連絡先　高知市朝倉南町四－四七－十

陶芸倶楽部　草庵窯（ソウアンガマ）

電　話　〇八八八－四三－九三二五

「高知漆芸教室」

漆塗りに魅せられて

楠本はるみ

漆の美しさに魅せられ、自分達でも何か創作できないものかと集まった仲間十数人。幅広い年齢層、職業、経験年数もさまざまですが、和気あいあいの中、技術向上をめざし、お互いの知識交換、情報提供に加えて、高松より伝統工芸作家の辻先生を講師としてお招きし、ほぼ毎月三回のペースで教室を開催しています。日程は全員の意見交換と先生の御都合によって調整されます。

（現在は日曜日、月曜日を主に朝十時より夕方四時まで。高知市横浜文化センターにて）

教室の運営の仕方もまだまだですが、とにかく魅せられて好きで集まった仲間が、楽しく肩のこらない会をモットーに努力しています。

高知にはいままで漆に関しての専門的な知識や、本格的な技術を身につけるチャンスが限られていました。

現在、メンバー全員、遠路はるばるおいでて下さる先生の御好意に感謝して、今までの趣味、特技を生かして、結構気軽に自分自身の作品づくりに励んでいます。

一つの漆器が生まれるまでの労苦を身をもって味わう反面、作る喜び、完成した時の喜びは感激もひとしおです。

本当の仕事がなされた漆器を作ろうと、知恵を出しあっています。

楽しくて刺激のある輪を、もう少し大きくしようと、現在仲間を募集中です。

初めての方も大歓迎です。気軽にご連絡下さい。

連絡先　高知市福井町三〇二〇

電　話　〇五〇－六八四－一八九六

（夜）〇八八八－二四－八六七八

散歩の途中で

はりまや町の一角、鉢植えの小木がセメントづくりのゴミ箱？の中に気持ち良さそうに鎮座していた。戸別収集からステーション方式に変更されたのが昭和四十六年。この時から収集は有料から無料になった。

ゴミは今も増えつづけている。「大切に使ってくれてありがとう」本来の役割を終えて二十五年生きてきたゴミ箱が語りかけてきた。

筆山文化会館は、あまり人々に知られていないようですが、以前のユースホステルの建物で宿泊施設もなくなり名称も変更され一階の広間を使って制作しております。電気窯も設置されていますので、たくさんの方々に利用して欲しいものです。

私達は、中年のおばさんばかり八人グループですが、皆とても仲が良く和気あいあいと楽しく制作しております。一度見においでませんか。

連絡先　高知市北竹島町二八五

電　話　〇八八八－三二－六四六六

風伯

「日本にないもの」

明治初年の大学南校（いまの東大の前身）の学生たちは、英語の単語を覚える際に、まるで当今の小学生のように、いとも神妙に斉唱したという。

「book　ビー・オー・オー・ケイ・ブック　本」

それでは、百年前の日本に、まだその単語に相当する事物や訳語がないような場合にはどうするか。

「bank　ビー・エイ・エヌ・ケイ・バンク　日本にないもの」と唱える。（外山滋比古「英語辞書の使い方」）

「ロブ・ロイ」という映画を観た。十八世紀スコットランドの雄大な自然を舞台に、悪徳貴族の陰謀と闘った実在の英雄ロブ・ロイの物語。彼がなによりも重んじたのは、一族の長（おさ）として、また男としての責任と名誉。

「お母さん、〝名誉（オナー）〟ってなあに？」「お父さんに訊いてごらん」「〝名誉〟ってのはな、男が自分で自分に贈るものさ」

「honour　エッチ・オー・エヌ・オー・ユー・アール・オナー　日本にないもの」

映画館の暗がりの中で呟いてみた。すると、バブルとともにどこかへ弾けとんでしまった「日本にないもの」が、続々とうかんでくる。

志（こころざし）、矜（ほこ）り、潔（いさぎよ）さ、廉恥（れんち）心、節度、品格……

現代版阿房陀羅経（あほだら）の「ないない尽し」がいくらでもつくれそうに思われた。（仁）

高知市文化振興事業団　出版案内

外崎光広　著
土佐自由民権運動史
著者の四十年に及ぶ研究を集大成。新資料による知見も盛り込みながら、土佐自由民権運動の全容を通史として明らかにした。
A5判・上製本・四二四頁　定価二、八〇〇円

外崎光広　編
土佐自由民権資料集
土佐自由民権に関する基本的資料百十余点を事件別に分類・収録。原資料によって各々の事件の実態が把握できるようにした。
A5判・三四四頁　定価三、〇九〇円

土居重俊・浜田数義　編
高知県方言辞典
古語から現代語にいたる土佐言葉一万四、七〇〇余の意味、用例、使用地点等を明示、注釈も加えた土佐方言唯一最大の辞書。
A5判・上製本・七三六頁　定価六、一八〇円

依光裕　編著
珍聞土佐物語（上巻）
——五十人の語り部たち
土佐の山や海辺の村の囲炉裏端で古老が語った地元の伝説や小咄の数々。ここでは地域別に二十名の語り部の百三十話を収録。
四六判・三九二頁　定価一、六〇〇円

依光裕　編著
珍聞土佐物語（下巻）
——五十人の語り部たち
県下各地の様々な語り部三十一名から寄せられた百二十話を採録。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。
四六判・四〇八頁　定価一、六〇〇円

岡林清水　著
高知県文学散歩
高知県の文学を地域に即して紹介、その舞台、歴史、作家の足跡等を訪ねて歩く〝旅のなかの文学史〟ともいえる文学案内。
四六判・二七八頁　定価一、八〇〇円

山本大　著
幕末の青春
——坂本龍馬の生涯
激動の幕末期を駆け抜けた坂本龍馬の一生を、史実に基づき分かりやすく描いた、子供から大人まで親しめる屈指の龍馬伝。
四六判・一六八頁　定価一、二〇〇円

藤本稔子　著
思いっきりみとめて子育て
——子育て　個育て　親育ち
保育者としての長い経験からみた子どもたちのいきいきとした姿。その豊かに育っていく過程を描きながら子育てを考える。
四六判・三五二頁　定価一、六〇〇円

高知市文化振興事業団　編
わがまち百景
——21世紀に伝えたい高知市の風景
高知市の誇りとして残したい風景を百カ所選定し、百人の随想と写真で紹介。様々な視点からの素晴らしい高知が実感できる。
A5変型判・二二四頁　定価一、二〇〇円

高知市文化振興事業団　編
高知のエスプリ
——ふるさとの未来（あす）を考える
県内のオピニオン・リーダー五十人が、各々高知へのあつい思いを語る。「文化高知」巻頭文からカットとともに収録した。
A5判・一六〇頁　定価一、二〇〇円

高知の文化を考える会　編
高知の文化を考える
文化について多方面から検討、豊かで個性的な市民主体の高知の文化をどうつくり発展させていくかを、市民的立場で考える。
A5判・一八八頁　定価一、二〇〇円

上森千秋　著
流れと波の科学
——川から海へ　水の働きを追って
高知の砂浜が消えていき、桂浜の五色石が少なくなったのはなぜか等、水と波の作用によって起こる様々な現象を平易に解説。
A5判・二四〇頁　定価一、五〇〇円

清水孝之　著
中山高陽
土佐の生んだ江戸文人画の祖中山高陽の業績を明らかにした労作。資料として未発表のものを含む書簡集・年譜等を収録した。
A5判・上製本・三六二頁　定価三、九一四円

筒井広道　著
画帳の歳月
高知画壇の重鎮の、美と画業についての随想集。県展の知られざる内情、肩のこらない絵画論等、興味尽きない美術への誘い。
A5変型判・上製本・二五六頁　定価二、〇〇〇円

高木啓夫　著
土佐の芸能
——高知県の民俗芸能
現存する土佐の民俗芸能をくまなく収集し体系化。それぞれを神楽・獅子舞・地芝居・太鼓踊り・民謡等に分類し、詳説した。
B5変型判・上製本・三四六頁　定価四、九四四円

文化振興事業団取り扱い書籍

編集／高知市文化振興事業団
発行／高知市
図録高知市史
考古～幕末・維新篇
A4判・上製本・四四六頁　定価二五、〇〇〇円

編集・発行／高知・まちと人の一〇〇年一〇一人委員会
自由の祭典
高知市制一〇〇周年記念事業記録
A4判・上製本・九八頁　頒価三、〇〇〇円

財団法人　高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町5丁目2番3号　TEL(0888)73-4365　郵便振替01680-5-14869